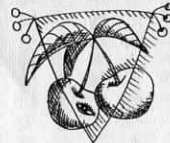


桜んぼユートピア

——共感体への出発



並 木 敏

♀ 「桜んぼユートピア」は、その出発に於ては東京キッドブラザース（注）最近、注目されている若手の劇団）の構想であった。彼らがその最初の標流、ニューヨークから日本へと帰って来たところから「桜んぼユートピア」の構想は出発する。彼らは帰ってきた、しかし帰るところが

なかった。祖国日本へ帰ってきて、四帖半のアパートでも確保して帰る場所を見出さねばならなかった。そこから「どこへ行こう？」と問い直したときに、行くための家を、村を、故郷を創っていくしかないと考えたのだった。

それは、ぼくら一人一人の世界にあるユートピア、例えば、サラリーマンにとつての「夢みるマイホーム」のようにぼくらの中に主観的にある「わがユートピア」を、この時代状況の中で如何に客観的な「われらがユートピア」に成長させるかという試みである。また、家族共同体や、国家共同体とは別の、「もう一つの家族」「もう一つの国家」を創り出そうという試み、それが「桜んぼユートピア」である。

♀ そして「桜んぼユートピア」は、最初は東京キッドブラザースのメンバーを中心とするクチコミで、それからマスコミ等を媒介として本格的な拡がりを持ちはじめようになった。

一人千円の参加費を払い込むことによつて、「桜んぼユートピア」の会員になり、累積された千円の参加費で買い求める安価

な土地の共同所有者になるというシステムは、マスコミには勿論、共同体と呼ばれる様々な運動、行為に携わる人達にもユニークなものであると思う。会員と呼ばれる「桜んぼユートピア」に参加する人達も八百人を越えたが、その人達は本当に様々な人達である。高校生、学生をはじめとして、サラリーマン、主婦そしてその子供達。そしてその人達の「桜んぼユートピア」への考えもまた様々であるが、もし共通の想いがあるとするれば、それは「やさしさ」だろう。やさしい出会いと触れ合いのために千円を投資するところから「桜んぼユートピア」は始まる。

♀ 「桜んぼユートピア」は、宗教、主義あるいは体系づけられた思想を持っていない。また、持つてはならないと考えている。「桜んぼユートピア」にとつて必要なのは「衝動」であり、「やってみたい！」ということなのだ。

「桜んぼユートピア」は遠心的、解放的でなくてはならない。つかれてはやって来る住むわけではない会員とのさらなる触れ合いの中で、住むものと住まないものもの

つ世界の累乗としてのそのものの世界、あるいは国家共同体とのパースペクティヴなしには「桜んぼユートピア」は考えられない。

「桜んぼユートピア」は共同体ではなく、見知らぬ人間同士の肉声のコミュニケーションの場、出会いの広場としての「共感体」であり、そこで共に何かをすることによりその土地をまたその他の諸々の物を共有する場としての「共有体」である。そして、現実のステージに虚構のユートピアを創ろうという一つのフィクションであり、まづりごととして建設される。

♀ そして、その最初の試みとして、鳥取県八頭郡佐治村に確保された土地で具体的な村建設のためのワークキャンプをこの夏に予定している。それは最初の出会いの場としての「祭り」であり、ユートピア幻想国家建設のための国家劇だ。

ワークキャンプでは、昼間は労働して、山小屋や道路等を作り、夜はロック・フォークを行うというのがその大目である。そして、それ以上のことは何も決まってい

ないと言っている。直径二〇メートルのドームを建設するという計画もある。それなりのバンドや文化人がやって来て、ロック、フォークフェスやパネルディスカッションも行われるだろう。しかしそれ以上に様々な人間が様々なことをやりやつて来るだろう。かまを作つて焼き物をやるという女の子もいる。病院を作ろうというもの、養老院を建てるといふもの、そこに自分の墓を作ろうというものまであれば、さかんに風呂の心配をしている女子高生もいる。桜んぼのピラにこうある。

「そこであなたの夢を育ててみませんか」

♀ そこで様々のお出合いがあるだろう。恋の道行きや、自らの共同体のために出ていくものもいるかもしれない。そして、そこで定住する者たちも出てくるだろう。

七月二〇日から八月三〇日まで行われるこのワークキャンプ・六〇日間の国家劇には、だれでも参加できる。三日以上、一日五百円の参加費で会員以外でも、だれでもがこの新しい出会いを求めたイベントに参加できる。そして、「桜んぼユートピア」は建設される。様々な夢をのせて、ぼくら

の行くための場所がやっと確保される。

まだ問題はたくさん残されているだろう。例えば生産の問題など。実際、鳥取に確保した土地には、現在なにも生産がない。しかし、そこで早急に養鶏をやろうというようなことは考えていない。むしろ、行商のようなことの方がおもしろいと考えているが、それも定住者達を中心に徐々に解決してゆけばよいし、またされるだろうと考えている。

「桜んぼユートピア」には千円を送るといふかんたんな作業の中で会員が増えつつある。そして、彼は、その家族や友達へと会員を拡げてゆくだろう。会員が増えるに従つて第二、第三の桜んぼユートピアを全国のあちこちに作つていこうと考えている。

桜の花はハラハラ散るけれど
あとに実が残る
桜んぼのようにささやかだけれど
心優しい連帯感を育てたい

（問合わせ先——東京都渋谷区南平台十五
—ライオンズマンション四〇五 桜ん
ぼユートピア事務局 〇三（四六四）〇八
四一

東京読者会

「ロンパリノート」より

最近、月刊キブツ府中読者会
は、月刊キブツ東京読者会と名
を変えた。そこで出しているミ
ニコミ「ロンパリノート」の一
号で、月刊キブツ四月号に載っ
ていた「労働の疎外の克服へ」
という文章の検討をしている。

肉体の復権

○ この文の中でロレンスが言
ってますね。「ぼくの偉大な宗
教は、知性より賢明なものとし
て、血を、肉を信じることなの
だ。我々は頭脳では誤まりを犯
すことがありうる。だが我々の
血が感じ、信じ、語ることは、
つねに真実なのだ」と。知性に
対する感性の復権というか、理
論などがんじがらめになって
動けない人間にとって、この言

葉はかなり考えさせると思っ
ますが……。

T 私は、現在の感性さえもつ
くられたものだと思う。

A 疎外された状況を、彼は言
いたくないんじゃないのかな？ 労
働組合で疎外という言葉を使っ
たけど、おっぱり出される感じ
がする。むしろ疎外という言葉
を知らない方が疎外を知ってい
るといった……。疎外を論理的
に説明できれば、もはや疎外じ
やないみたいな感じ。体でしか
感じえないのが疎外だと思う。
M それはあると思うな。疎外
感の中にたたまこまれている人
間に対して、その状況の外にい
る人が疎外だ疎外だと騒いでも
そんな軽々しく疎外と言ってい
るなという自分がある。お前

なんかにわかるかといったね。
でも、言葉すべてがそうだと思
うんだけど、状況すべてを伝え
ようという意欲のもとに、疎外
なら疎外という言葉で表現しな
くちやならない。

A うん、それが前提として確
認されていればいいけどね。そ
んな感じをうけない場合が多い
んだな。

※

○ 思想の科学に書いてあった
けどね、肉体の言葉ってこと。

肉体のリズム。体力を得るため
に体操があるんじゃないかって、肉
体の表現（言葉）として重要性
があるんじゃないかって。ヨガ
の場合でも、眠ることも食事さ
えもヨガの中に含まれてしまっ
て、すべてがその精神に一致して
まうんだな。

M あきらちゃんか、いつか言
葉の肉体化っていったけど、生
活と一緒にやるなかでしか伝え
られない部分と関係ないのかな。

H 言葉で伝わらないことでも
一緒にいれば感じられる部分が
ある。それが重要なんじゃない
かな。

A そこでしかコミュニケーション
できないと思うんだ。イデオロ
ギーはああそうですか一致しま
したねと言ったところで、何か
やるかどうかとは別問題でしょ
う。それだけで終わっちゃう可
能性がある。何かつくるとして
も、そこからじゃないかと思っ
んだ。

○ 生活を一緒にすることも必
要だとは思いますが、ぼくはそれ
だけじゃなくて、その人が一人
の人間として何に立脚している
かが重要なんじゃないかな。こ
こに急に来た人でもコミュニ
ケイトできる部分はあんだし。
A 言葉でコミュニケーションで
る部分があるのは確かなんだけ
どね、共に労働するなかでしか
伝えられない部分を言いたいん
だな。今までは言葉でしかイデ

オロギーが語られなかったと思
うんだ。

○ その人の言葉とき、その人
の生活はけっして遊離していな
いと思うよ。どこかでつながっ
ているしね。

A 言葉にするとすべてがきれ
いに感じるんだよね。そんなに
きれいな言葉なんだっていう自
分がいるんだ。きれいに語られ
ると、重みが感じられなくなっ
てしまう。

○ それは、その人によって違
うと思うんだ。聞く人話す人に
よると思うんだ。テロリストが
テロリストの体を持っていない
場合みたいだね。

M そこに「人しれず微笑えま
ん」って本があるんだけどね、
ぼくなんか、ぼくなりに笑えな
い彼女の重さが理解できるんだ
な。彼女は本にそれを書いてい
るけど、それが伝ってくる（ま
あばくりにだけど）のはどう
いうことなのかな？

A それはね、結果としてその
言葉があつたということだね。
その詩がなくても、彼女がジレ
ンマした状況を知っている自分
がいるわけだろう。

M あ、そうか。うん、そうな
んだよね。その場合、彼女との
間には共通の状況があつたとい
うことでしよう。その限りにお
いて彼女を感じる事ができる
んでしよう。だけど、今問題に
なっているのは、共通な状況（そ
れは一緒に生活していくことで
もある人だけど）を共にするな
かでしか伝わらない部分と、共
にくらしていかないけど、それ
でも伝えようとするイデオロギ
ー的なものとの間のギャップで
しよう。……

※

こんな調子で話がつづくの
だそうである。読者会は毎月第
二第四土曜日の夜、東京都府中
市四谷3-55-20ぐるうぶ・も
ぐら電〇四二二-64-一七二四

協会 日誌

5月12日 キブツのA・ベン
ヨセフ氏が日本の共同体で長期
滞在するため来日。（59頁）

5月14日 キブツ研修生の家
族会。（59頁） 山尾三省、原
康男、野本三吉の三氏の座談会。

5月15日 沖繩本土復帰の日。
いや、支配者交代の日。

5月18日 九州大山町のコミ
ニティーづくりの記録映画「わ
が愛する緑の町」を観る。

5月21日 共同体を志向する
「藍の一族」の会合に出席。

5月23日 ニクソンの訪ソ。
巨大権力者間のボス交。

草刈善造氏がきて、阿寒学園
の構想と見通しを語る。

5月25日 協会の第五回定期
総会。農協中央会の宮脇朝男会
長も出席して「人間」や「哲学」
の大切さを話す。

5月27日 東京渋谷の「桜ん
ぼー」で「人間」や「哲学」の
大切さを話す。

ぼーユーピア」事務局訪問。

5月28日 東京へきた大倭紫
陽花邑の矢追日聖夫妻、柴地則
之氏を野本三吉氏とともに尋ね
る。

5月29日 ベンヨセフ氏の歓
迎と「キブツの集団教育」の出
版記念の会を行なう。

5月31日 テルアビブ空港事
件がおこる。これ以後、問合
せその他に忙殺される。（2頁）

6月2日 最近「我らひゅう
まん」を書き、「あらくさ」に
住む松本曜一氏くる。（29頁）

6月5日 第二次ラマトヨハ
ナン・グループの河見康博氏く
る。同グループの高橋修子氏と
結婚したとのこと。

6月12日 金峰SCIセンタ
ーの小林茂夫氏がきて、サルボ
グや運動などについて話す。

6月15日 東山産業の志渡勇
一氏がくる。

山岸会に四ヵ月いたフィリッ
ピンのM・ディアズ氏くる。

新しい農村指導者の雑誌

地上

B5判●定価140円(通常月号)



激動の'70年代を乗り切るため 農協役職員、農業経営者は

全員読もう

正確な情報／正しい分析による

重点特集

●3つの重点ポイント

農業・農政の問題点をつく

農協のあるべき姿を追求する

生産と販売戦略の方向をさぐる

お申し込みは農協へ

百号の言葉

▽この雑誌も今号で通巻百号になる。「よくここまでこれたものだ」と今更ながら思う。これまでこの雑誌を読み、タダの原稿を書き、批判し、激励の言葉を投げかけてくれた方々に、心から感謝したい。ぼくらは、この雑誌づくりを通して種々な「なかま」と結びつけたことを何よりも喜んでいるのだ。

▽この時代は、ぼくら人間が負いきれないほどのたくさんの課題をかかえてしまっている。だが、自らの非力を嘆かずに、ぼくらの小さな努力をつくし、お互いの努力をつなげてゆきたい。人間と人間、人間と自然との間に、生き生きとした協力と共存の関係を深く深くとりもどしてゆくことなしに、ぼくらの世界は滅びへの坂をころがってゆくばかりなのだから。

▽本号で中山明氏が書いている、小さなタコが巨大な軍用飛行機に立ち向かう姿は感動的である。彼の文章は、飛行機がタコよりも常に強いわけではないことを暗示させる。ぼくらの活動も、まさにタコをあげるようなことだろうが、生身の人間のあげるタコの真の強さを示してゆきたい。これからも、ぼくらはあせらずにぼくらのタコをあげつづけよう。

—— テツ

▽百号の歴史のうち、自分がその編集に参加したものはわずかにすぎないというふうに思いを至す時、この小さな雑誌がそれ自体の生命を持っていることに気づく。この小さな灯を消さないために、あとに続く人々の出現を期待しよう。

—— 九士

▽再び長野県の過疎に悩む部落を友人と訪れた。若栗峠という北アルプスのパノラマ台のような峠を二百メートルも下った、別天地のような緑の輝きの中に

ある。保養センターで湯につかり、もてなしを受け、身も心も洗われる思いをした。—— ヒコ

▽新しい人間関係、家族関係の創造をノと彷徨する若者たちのなんと多いことか。彼らをつき動かしている「充足」へのあがきは、自分の内のある衝動にながってくるものがある。だが、ふみとどまることの厳しさも覚えねばなるまいと思う。—— 恭子

■会計より 百号まであえぎあえぎ続けてきたこの雑誌が、何とか次の世紀へのり出すことができるように、協力して下さい。購読を継続し、新購読者をさそって下さい。お願いします。

■五月号の誤り 「ユートピア」共同体の歴史」の中の30ページ下段の14行目に一八三〇年とあるのは、一八〇三年の誤りです。

■直接購読（入会）のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者（キブツ会会員）によって支えられています。1年間（12号）の会費は入会金（200円）とも2,000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書いて、送って下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京＝新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店
京都＝京都書院 札幌＝富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台＝八重州書房 盛岡＝第一書房 福岡＝九大生協 名古屋＝おばた文庫 富山＝清明堂 松本＝遠兵ブックセンタ
■印刷所＝創土社 東京都港区芝5-16-13
電話 452-0501・6069

「月刊キブツ」 1972年7月号（通巻100号）

頒価 150円 送料16円（1年間2,000円）

東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイッ10号 日本協同体協会

電話 370-2813 振替・東京 24403